

者は、実にそこ(『輪廻』)より抜け出しがたい、あるいは仏陀に助けられて抜け出すべきものであるのだから、抜け出しがたいのである。」と説く。(③・④写本は未見で、①②⑤⑥三写本を見た。)

ハリアント1.では、①・⑤の写本は *tasmād eva* を欠き、荻原本の C・N・S 写本と同じである。これは意味から見て、②写本・L・チベツト訳の *tasmād eva* があつた方がよいだろう。

ハリアント2.は、荻原本の写本と同様に写本①・②・⑤は *viṣyanditena* という読みをする。荻原本の校訂では、チベツト訳に *viṣyanditena* と字形の類似する *viṣpanditena* を導き出したのである。

註

(1) 刊本 (T) S. Lévi & Th. Secherbatsky : *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*, Bibl. Buddh. XXI, part I (Prathamam kośasthānam), 1918.

刊本 (S) Th. Secherbatsky & U. Wogihara : *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*, Bibl. Buddh. XXI, part II. (Dvitiyam kośasthānam), 1931.

原始仏教における信の原型

—— *pamuñcassu saddham* の誤解を正す ——

村上真完

今日、内外の学界において、原始仏教經典における信の意義が、十分に理解されていないように思われる。問題は原始仏教經典の中、(一)『スッタ・ニパータ』(Sn)の最後の章(彼岸道品)の最後から四番目の偈(Sn. 1146)と、(二)『律』の「小品」等に伝えられる梵天勸請の段の世尊に帰せられる一偈との、二偈の解釈が定まらない(誤解が広く行われている)ためであろう。まず

(一) Sn. 1146 *yathā abhū Vakkali muttasaddho Bhadrāvudho Ājāvi-Gotamo ca,*

evam eva tvam pi pamuñcassu saddham : gamissasi tvaṇṇ piṇḍiya maccedheyypaṇaṃ.

は、例えば中村元教授の最近の改訳では

「ヴァツカリやバドラヴァダやアーラーヴィ・ゴータマが信仰を捨て去ったように、そのように汝もまた信仰を捨て去れ。そなたは死の領域の彼岸に至るであろう。」

刊本 (S) L. de la Vallée Poussin : *Vasubandhu et Yaśomitra*, Paris 1914-1918 (*Trīṭyam kośasthānam*).

刊本 (4) Narendranath Law : *Abhidharmakośavyākhyā* (I-III), Calcutta O. S. No. 31, 1949-1955.

刊本 (S) U. Wogihara : *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*, Tokyo 1932-1936.

「ビンギヤ」(『ブッダのこと』岩波文庫、一九八四年、二四一頁。傍線筆者、以下同じ)

とある。問題の箇所は、「信仰を捨て去った」と「信仰を捨て去れ」という訳文にある。⁽¹⁾

梵天の勸請に応じた仏のことば

(二) *apārutā tesam amatassa dvārā ye sotavanto pamuñcantu saddham.*

vihimsasānhi paguṇaṇaṃ na bhāsi

dhammaṃ paññaṃ manujesu Brahme ti.

(*Vm. I. p. 7, D. II. p. 39, M. I. p. 169, S. I. p. 138*)

は、中村元訳では

「かれらに甘露の門は開かれた。耳ある者は聞け。

「おのが信仰を捨てよ。梵天よ。人々を害するであらうかと思つて微妙なる法を人々には説かなかつたのだ」(『コータマ・ブッダ(釈尊伝)』(昭和三十三年、一二〇頁)⁽²⁾

とある。右の付線部に問題がある。しかし中村元教授は右によつて先の(一)について

「恐らくヴェーダの宗教や民間の諸宗教の教条(ドグマ)に対する信仰を捨てよ、という意味なのであろう。最初期の仏教は信仰(信仰)なるものを説かなか

った」

と註記している(『マタのこころ』四三二頁)。

いま、この「信仰を捨てよ」という解釈が、仏教の伝統的解釈からすれば誤りであろう、ということ論証することによって、原始仏教経典において信の意義が積極的に説かれていゝ、ということを示してみよう。

まず第一はパーリの伝統的解釈である。『小義釈』(N²)は

Yathā Vakkhali-thero **mutasaddho** saddhā-gar-nko saddhāpubbaṅgamo saddhādhimutto saddhādhī-pateyyo arahantapatto. (§512)

『あつうぶ(たふさば)ヴァッカリ上座が信を寄せ(mu-ta-saddha)信を重んじ、信を先行させ、信に心を傾け(saddhādhimutta, 信に志向し)、信を主となしつゝ、阿羅漢[位]に達したように(上略)』

saddham muñcassu pamuñcassu sampamuñcassu adhimuñcassu okappehi, sabbe saṅkhārā aniccā...ti saddham muñcassu... (§407)

『信を寄せよ(放て=発せ)発せ(前に発せ)置け(一緒に発せ)信仰(志向)せよ、信賴せよ、「一切の諸

行(身心の勢力、万象)は無常である」と信を寄せよ。

(上略)』

と述べる。ここには「信を捨てよ」という解釈の余地はない。

N²のあつうぶの後、Snの註釈(Pj)およびN²の註釈(N²A)が作られている。その両註釈は同文で次のように述べている。

yathā Vakkaliṭthero saddhādhimutto ahoṣi Saddhādhūrena ca arahantaṃ pāpuṇi, yathā ca soḷassanaṃ eko Bhadravudho nāma, yathā ca Āḷavigotamo, **evam eva tvam pi pamuñcassu saddham**; tata saddhāya adhimuccanto sabbe saṅkhārā aniccā ti ādinā nayena vipassanaṃ ārabhita maccedhaya-ssa pāraṃ nibbānaṃ gamisasi ti (Pj. II. pp. 606²⁶-6071,

N²A III. p. 941¹⁴⁻²⁰)

『あつうぶ、ヴァッカリ上座が信に志向し(心を傾け)た者となつて、信を持つことによって阿羅漢となることを得たように、またちょうど十六人のうちの一人バドラーウダという者のように、またアーラヴィゴータ

々のように、『また同じように君も「仏に」信を寄せよ(発せ)』(Sn. 1146c) それから信に志向し(心を傾け)つゝ、「一切の諸行は無常である」云々というふうに觀察に励んで、「君は」《死神の領域のかたに》寂滅(涅槃)に《行くであらう》と。』

これは信の勧めであるが、信を捨てることを意味しているのではない。両註釈は最後の偈(Sn. 1149)を註釈した後、もう一度先の偈の第三句を引用して、次のように結んでいる。

“**evam eva tvam pi pamuñcassu saddham**” ti imiṇa Bhagavato ovādena attani saddham upādetvā saddhādhūrenū eva ca vimuccitvā taṃ saddhādhimuttataṃ pakāseto Bhagavantam āha: **evam mam dharethā (N²A dhārahi adhimuttacittan) ti.**

(Pj. II. p. 607¹⁸⁻²¹, N²A III. p. 951⁶⁻¹⁰)

『《おれと同じように君も信を寄せよ(発せよ)》(Sn. 1149c) という世尊の教えによつて、自分(仏)に対する信を生ぜしめて、また信を持つことによってのみ解脱して、信に志向していることを明らかにして、「ピンギヤは」世尊に申上げる。《このように私が心に信仰

している、とお認めおき下さうませ》(Sn. 1149d)と。』右には明確に「信を生ぜしめて(saddham upādetvā)」と述べている。このように、パーリの伝統(註釈文献類)からは、「信を捨てよ」という解釈がなりたたないことを知る。

それではSnの文脈から見るとどうであらうか。彼岸道品は、南インドに住むバーヴァリの十六人の弟子が、師の命によつてマガダの都に仏を訪ねて教えを受ける對話が中心をなしているが、その最後の節において、弟子の一人ピンギヤが師のもとに帰って報告をし、仏への讃美を語る。それに対して師はいわく

『一体おまえは、ピンギヤよ。寸時もその方(=仏)から離れて住むのか』(Sn. 1138ab)と問う。ピンギヤは答える。

『いいえ、バラモンよ。私はその方から寸時も離れては住みません。』(Sn. 1140ab)

『私は』その方(仏)をただ意の眼で見ます。バラモンよ。夜に昼に不放逸にして、「その方」を礼拝しつつ、「私は」夜を過します。…』(Sn. 1142abc)

『老いて力も勢いも弱い私の身は、もうそれでそこ

(仏前)に行きません。常に思いを馳せて行くのです。なぜなら、私の意は、バラモンよ。その方と結ばれているのです。』(Sn 1144)

このようにビンギヤは世尊に対する思いを述べる。そこに先掲の偈が来るのである。それは世尊のことばである、と *Pj* は伝えている。彼の信をさらに仏が勧め励ましていくというのである。それに対して彼は答えて、仏と仏の説かれたことに對して、心に信仰していることを表明して (Sn 1149) この *Sn* の最後章が結ばれているのである。このように、先の偈が「信を寄せ」「信を發せ」と説いている、と解することは *Sn* の文脈にも即している。

(一)の梵天勸請の段の偈について、パーリの註釈は一致して次のようにいう。

pamuñcantu saddham ti sabbe attano saddham
pamuñcantu vissajjantu (Sv mañcantu vissajjantu).
(Sp. V. p. 968¹⁸, Sv. II. p. 471¹⁹, Ps. II. p. 181²⁰, Spk. p. I. p. 203²¹)

これは先の(一)において見た *Nd*² や *Pj* (*NdA*) の用語例を参考にすれば

信為能入」という名言があるが、その根拠として梵天勸請の段が引かれている。問題の偈には

我今開甘露味門、 若有信者得歡喜、
於諸人中說妙法、 非惱他故而為說、

(「大正」二五、六三三)

とあり、信を有することが聞く者に期待されているのであって、信を捨てることではない。

以上、要するに「最初期の仏教は信仰なるものを説かなかった」ということには、再検討の要がある。特に *Sn* 最後の章が信の勧めと信の表明とをもって結ばれていることは、看過すべきではないであろう。「信の原型」と題したゆえんである。

註

(1) 中村博士も同旧版(昭和三三年)では「信仰により了解したように」「信仰により了解せよ」と訳していた。これは荻原雲来訳「信に由りて解し」「信を起して解しせよ」に同意である。また「信念によって解脱した」「信念によって解脱するがよい」(渡辺照宏訳)とも訳される。これらの解釈は恐らく註釈書の *saddhachinnuta* に由来するであろうが、その語は「信に心を傾けた」「信に志向した」の意と解すべきである(*CPD*・*adhinnuta* を参照)。

『信を寄せよ(発せよ)』とは、皆自分の信を寄せよ(発せよ)、「置け」

と解される。そしてこの解釈は同じ註釈の次の文から支持される。すなわち

idani pana sabbo jano saddha-bhājanam upanetu,
pūressāmi nesam saṅkappan ti.

(Sv. II. p. 471¹⁴⁻¹⁶, Ps. II. p. 181²⁰⁻²², Spk. I. p. 203¹⁰⁻¹¹)

『しかし今や、すべての人々は信の器を捧げ(向け)よ。』[私は]彼らの思いをかなえよう(満たそう)』

というのである。ここからは「信を捨てよ」という発想はうかがえない。「信を寄せよ(発せよ)」である。

さらにこの偈は漢訳にも種々に伝えられているが、いずれも「信を捨てよ」とは言っていない。たとえば『四分律』卷三十一(「大正」二二、七八七中)に

梵天我告汝 今開甘露門、
諸聞者信受 不為憍故說、
梵天微妙法 牟尼所得法、

とあり、「諸の聞く者は信受せよ」と解される。他の例は省略するが、龍樹の『大智度論』卷一のみにふれておきたい。そこには浄土教の諸師にも引かれる「仏法大海

最近の K. R. Norman 記には declared his faith, declare your faith とある。これは筆者の理解に近いのかも知れない。他の諸訳例の検討は省略。

(2) 筆者は「信を寄せよ(発せよ)」「自分の被」書を想って「私は」熟知の微妙なる法を…と解する。 *pamuñcantu saddham* を我が国の多くの学者は、宇井伯寿(『印度哲学研究第三』七八頁)以来「信仰を捨去れ」と解する。「ただし藤田安達博士は「信を發せよ」と解した(『原始仏教における信の形態』『北大文学部紀要』No. 6 七〇頁)」。H. Oldenberg と T. W. Rhys Davids を例外として、海外の学者も多くは「信を捨てよ」と解している。これらは、註釈類の理解が十分にいきとどかず、また漢訳の伝承にも不注意であったためと考えられる。

〔付記〕 本稿の着想は、及川真介氏との共著『仏のことば註』(一)(二)即刊。全四巻、付篇「索引・辞典」一巻の予定。春秋社発行)の原稿を作製するため *Sn* と *Pj* を熟読する間に得た。その読解は及川氏の努力が出発点となっており、筆者は氏に多くを学んだ。 *pamuñcantu saddham* の解釈は筆者の発見であるが、本稿で取りあげたパーリ資料については、兩人ともほぼ同じ理解に達している。今、一まず筆者の責任において、問題点を明らかにしておく。詳しい資料は同書四)において示されるであろう。

(昭和六二年九月二日)

佛教論叢

第 32 号

昭和 63 年 9 月

浄土宗教学院